

1971年、ふたつの〈孤独〉 —村上春樹の「僕」、須賀敦子の「私たち」—

孤独死、おひとりさま、ぼっち・・・世の中には、〈孤独〉をめぐるキーワードが溢れ、〈孤独〉を否定的に捉えるもの、あるいは称賛するものなど多種多様です。そんな中で、私たちは自らの〈孤独〉と、どのように向き合っていけばいいのでしょうか。

今回は、偶然にも1971年という共通項を持つ二つの文学作品をご紹介します。そこに描かれた孤独のあり方が、私たちそれぞれの〈孤独〉について考える、ひとつの足がかりになればと思います。

村上春樹「スパゲティの年」

『カンガルー日和』講談社文庫、1986年



主人公の「僕」にとつて、1971年は「スパゲティの年」だった。来る日も来る日も、「まるで何かへの復讐のよう」に、一人でスパゲティを茹で、食べつづけた。

そんなある日、電話がかかってくる。電話の主は彼のかつての知人の恋人で、その知人の居場所を教えてほしい、という。彼は知人の居場所を知っているが、教えることはできない。そこで彼は頭の中で「空想のスパゲティ」を茹で始め、「悪いけど」「今スパゲティを茹でるところ」だから手が離せない、と言って、電話を切ってしまう。

「僕」は後になって、彼女に何もかも教えてやるべきだったのかもしれない、と悔やむ。そして「永遠に茹でられることなく終わった」空想のスパゲティの存在を悼み、次の言葉で物語の幕を下ろす。

デユラム・セモリナ。

イタリアの平野に育つた黄金色の麦。

一九七一年に自分たちが輸出していたものが「孤独」だったと知ったら、イタリア人たちはおそらく仰天したことだろう。

「僕」にとつての〈孤独〉とは何だったのか。

それは単に、一人でスパゲティを食べつづけた、ということではないだろう。彼が、1971年以前から「復讐」したいほどの「何か」に打ちのめされていたことは想像できる。しかし、その「何か」について語られていないのは、おそらくそれが彼にとつて、劇的で圧倒的な力を持つものではなく、むしろほとんど実体のない、つまりは語るほどでもないような種類のものだったためではないか。

実体のないものには抵抗のしようもない。そこで彼にできることといったら、スパゲティを茹でて食べる、というような語るほどでもない日々を、自ら積み重ねることしかなかった。つまり「スパゲティの年」は、「何か」から逃れるために彼が編み出した、大がかりな、しかしごく個人的な虚構であり、そのための作業と、根源たる「何か」の全てを指して、彼は〈孤独〉と呼んだのである。

ところで、1971年というのは、一般的には、どんな年だったのか。

沖縄返還協定調印式、ドルショック、イタイイタイ病訴訟で住民側全面勝訴、新宿クリスマススツリー爆弾爆発、マクドナルド日本第一号店開店、日清カップヌードル発売。年表にはそのような出来事が並ぶ。

暮らしが豊かになる一方で、公害問題など高度経済成長による「ひずみ」が次々と露呈し、学生運動の熱も冷め、「シラケ」たムードが漂い始めていた時代。それが一般的にいわれる「1971年」だ。

もちろん、時代というのはそんな風に端的にまとめられるものではない。しかし「僕」の態度には、そうした時代の気配と、それに対する抵抗とが、感じられながら共存しているようにも見える。

そしてこの年、「僕」が食べつづけたスパゲティの原産地・イタリアでも、もうひとつの〈孤独〉が、時代の波と押し合うように、生まれようとしていた。

◆ 須賀敦子 『コルシア書店の仲間たち』

(文春文庫、1992年)



生前の著書はわずか5冊ながら、今も多くのファンを持つ須賀敦子(1929～1998)。2作目の著書にあたるこの本は、若き日

の須賀がイタリア・ミラノで活動をともした、コルシア・デイ・セルヴィ書店のエピソードを中心に綴られている。

コルシア書店は、一般的な意味での「書店」とは少し違う。

戦後間もない1946年、レジスタンス活動家でもあった二人の神父によって作られたこの書店は「かたくなに精神主義にとじこもろうとしたカトリック教会を、もういちど現代社会、あるいは現世にくみいれようとする」カトリック左派の思想を基盤とし、宗教活動家や作家、学生らが「こったませ」に議論し交流する、いわゆるサロンの役割を果たしていた。須賀がそのメンバーに加わったのは31歳のとき、イタリアに渡って2年目の1960年だった。

須賀はコルシア書店で精力的に活動する。谷崎潤一郎、川端康成などの日本文学をイタリア語に翻訳し、またキリスト教関連の論考などを日本語で記した個人誌「どんぐりのたわごと」も発行している。さらに、書店の中心メンバーであったベッピノ(ジュゼッペ)・リッカ氏と結婚するが、夫の突然の死により、結婚生活はわずか5年で終わりを迎える。須賀はその後も書店に関わり続けるが、1971年、41歳のときにイタリアを去り、日本に帰国する。その頃には須賀だけでなく、他の主要なメンバーもほぼ書店の活動から離れ、書店自体のスタンスも、交流の場というより過激な闘争の場へと、変わり始めていた。

コルシア書店において須賀と「仲間たち」が追い求めていたものは、須賀の言葉によれば「キリスト教を基盤とした、しかも従来の修道院ではない生活共同体」であった。18歳で洗礼を受けた須賀は、そのような共同体が「はたして可能なか」ということを、イタリアに渡る以前から考え続けていたのである。

その問いへの答えを、須賀は本書の中で明らかにしていない。須賀の帰国後、書店は教会当局からの圧力により移転と改名を強いられる。これはコルシア書店という共同体の事実上の崩壊といえるが、須賀はそのような審判を下してもいない。代わりに「ダヴィデに―あとがきにかえて」と題した本書の最終章で、ひとつの「結論」のようなものを示している。

コルシア・デイ・セルヴィ書店をめぐる、(略) それぞれの心のなかにある書店が微妙に違っているのを、若い私たちは無視して、いちずに前進しようとした。その相違が、人間のだれもが、究極においては生きなければならぬ孤独と隣あわせで、人それぞれ自分自身の孤独を確立しないかぎり、人生は始まらないということを、すくなくとも私は、ながいこと理解できないでいた。

若い日に思い描いたコルシア・デイ・セルヴィ書店を徐々に失うことによって、私たちはすこしずつ、孤独が、かつて私たちを恐れさせたような荒野でないことを知ったように思う。

書店を離れた途端、須賀の中にいきなり「究極

においては生きなければならぬ孤独」が確立したわけではないだろう。物理的な距離に加え、「徐々に失う」ための時間も必要だった。その間に、須賀の関心は、理想の共同体の追求から、その原子たる一人ひとりの「生」へと移っていったのではない。荒野を森に変えるには、ただ寄り集まるだけではだめで、まずはそれぞれの樹が、自分の力でまっすぐに立たねばならない、と。須賀にとつての1971年は、ひとつの終わりであると同時に、彼女と「仲間たち」の、「人生」の始まりでもあったのだ。

◆

ひたすら内面へと向かった村上の「僕」と、連帯を指した須賀の「私たち」。一見対照的な両者だが、どちらも「個」を主体とした、アクチュアルな〈孤独〉のあり方を示しているといえる。「僕」は虚構によって、須賀は人生そのものによって、外から押しつけられる〈孤独〉を乗り越え、自らの底にある〈孤独〉に迫ろうとしたのだ。

現代の〈孤独〉は、自己啓発から社会問題まで、じつに様々な文脈で語られる。しかし、そのことが〈孤独〉をいわば「社会共通認識」へと引き上げ、個人から引き離してしまっている面もあるだろう。〈孤独〉のことなど考えなくても生きてはいける。しかし本当に苦しい時、自分を支えるものは自分の中の〈孤独〉しかないのかもしれない。村上と須賀が描いた〈孤独〉は、そんな示唆を与えてくれる。

読書会を開催しました @忘日舎 (西荻窪)

2016年12月17日、西荻窪の古書店・忘日舎にて、須賀敦子『コルシア書店の仲間たち』の読書会を行いました。

参加者は10名。まずは一人ずつ、本書の中で印象的だった点を挙げたのち、フリートーク形式で議論をスタート。作品について、また須賀敦子という作家について、ときに横道にそれながらも、印象深い言葉がさかんに飛び交う二時間となりました。

●透徹したまなざしと「時間」の力

須賀敦子は本書で徹底して「人」を描いています。その多くは、夫・ペッピーノをはじめ、本書が書かれた時、すでにいなかったはずの人々です。そうした人々を描く須賀の筆致に対し「透徹した目で人を見ている」「感情や思想を前面に出していない」「中に入って行かない」「乾いたような文章」といった意見が多く出ました。同時に、記憶をいつくしみ、大切に保存しておくような温かさ、懐かしさを感じた人も多かったようです。

また、須賀自身の信仰やコルシア書店の理念、夫との思い出など、重要なはずのことがほとんど書かれていない点も本書の特徴として挙げられました。「何を書くか」よりも「何を書かないか」が強く意識されている、という興味深い意見もありました。

●「共同体」について

本書の大きなテーマの一つに「共同体」があります。須賀がコルシア書店にいた1960年代とは異なり、現代では、共同体が熱をもって語られることは、決して多くはありません。そこで、共同体としてのコルシア書店のあり方や、現代における理想の共同体など、共同体に対するそれぞれの思いを述べてもらいました。

コルシア書店に関しては、「メンバーや名前や場所が変わっても、それは形が変わっただけで『崩壊』ではない」という考えが示されました。その他、「一人ひとりの『個』が確立されていない共同体は脆い」「共同体は危ういバランスの中で奇跡的に成り立つもの。一人でも欠けるとバランスが崩れて崩壊しやすい」「共同体というと『みんなで同じ方を向く』というイメージがあり、少し怖い。『場』や『居場所』のほうがかしっくりくる」など、本書の内容を超えたさまざまな観点が提示されました。

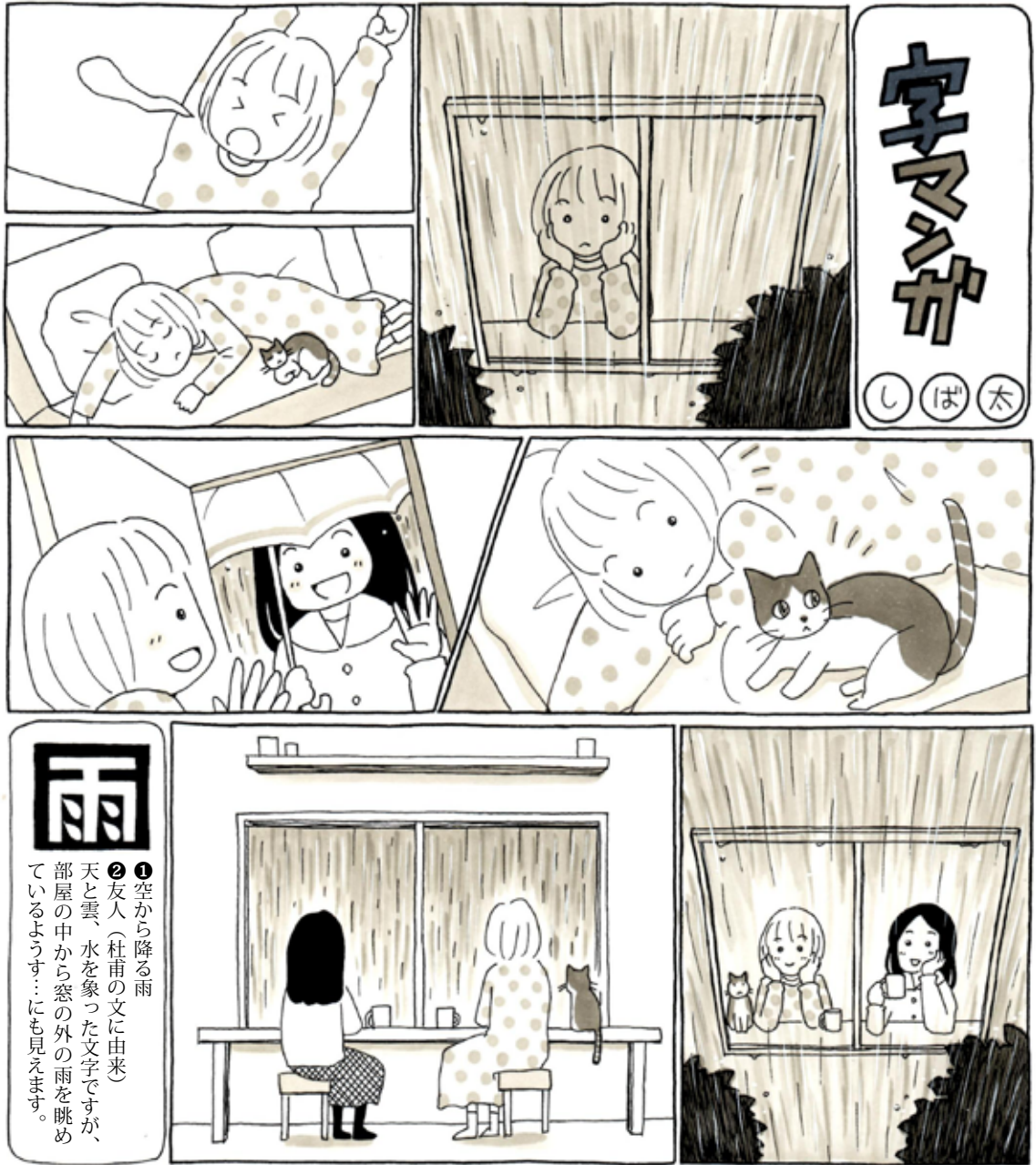


忘日舎 the book store 東京都杉並区西荻北3-4-2

www.vojitsusha.com

きょうのお仕事ことば③【ガッチャンコ】…複数のものを合体させて一つにする、の意。ホッチキスの音が語源か。幼児語のようだが、会議などでも意外と普通に使われる。例「来月の○○会議の資料って、全部うちで作るんだっけ」「いえ、実績の部分は●●課がデータを持ってるので、それとうちの資料をガッチャンコするだけです」

ひとモジのモノガタリ



字マンガ

しば太

雨

① 空から降る雨
② 友人（杜甫の文に由来）
天と雲、水を象った文字ですが、部屋の中から窓の外の雨を眺めているようすにも見えます。

編集後記

—リニューアルによせて—

2009年、本紙の前身である「活字不定期便 シップ」を創刊しました。共同体や他者との連帯を何となく志向して始めたものの、方向性が定まらず、2015年発行の第九号をもって一旦休刊となっておりました。

休刊中、「シップ」をどんな媒体にしたいのか改めて考えました。結果まとまったのは、片手間程度に読めて、それでいて思考に何かしらの刺激を与え、その動きを助けられるような「軽くて硬い紙」です。

ただし思考だけでは足りない。思考を動かすのはやはり「ことば」であり、逆もまた然りです。その両輪の回転を促す媒体でありたいという思いから、「ことばと思考 シップ」と新たに名付けました。

本紙に書かれていることが、何かに対して直接作用することはないかもしれませんが、しかし、誰かの思考、誰かの沈潜の、ささやかなお伴になれば、それだけで幸いです。

藤田一樹